

JSL 児童への支援実践における支援者のスキヤフオールディングと教育観

—読書感想文を書く活動の分析・考察をもとに—

佐々木ちひろ（名古屋大学大学院生）

1. 研究の背景と目的

これまで年少者日本語教育実践におけるスキヤフオールディング¹⁾の重要性が論じられてきた。Scrivener (1994) が教師のビリーフや価値観は教師の行動の土台となっていると述べるように、支援者は子どもの主体的な学びを支えることが大切であるという教育観に基づき、発表者は実践の中でスキヤフオールディングを行ってきた。本研究は、発表者が Y (仮名) への在宅支援で行った読書感想文を書く活動でのスキヤフオールディングを批判的に省察し、そこからスキヤフオールディングを行った発表者の教育観を捉え直すものである。

2. 研究の概要

2.1 研究協力者である Y について

Y (2019年3月現在小6) は、2014年にフィリピンから来日した女兒である。家庭内での使用言語はタガログ語で、英語もある程度理解し、話した。来日時の Y の日本語力はゼロ初級であった。Y の日本語支援は転入後すぐに開始され、発表者が担当した。Y の日本語は上達し、日常生活に必要な会話は同年齢の他の子どもたちとほぼ同じようにできるようになった。しかし、教科学習に必要な日本語の力はまだ十分でないように見受けられた。そこで、Y と保護者の希望を受けて、2017年4月から8月にかけて、小学校での支援に加えて、在宅での学習支援も兼ねた日本語支援を行った。在宅支援は、週一回、一、二時間実施した。

2.2 読書感想文を書く活動の概要

本研究では、在宅支援の初日に行った、読書感想文を書く活動を事例とする。活動では、齋藤孝 (2011) 『齋藤孝の親子で読む国語教科書5年生』に掲載されている作品の中から、発表者と相談し、Y が「注文の多い料理店」(宮沢賢治原作) を選んだ。それを二人で一段落ずつ交互に音読し、わからないことばを確認しながら、時々感想も言い合いながら読み進めた。そして、発表者と作品の感想を話し合いながら、Y が原稿用紙に読書感想文を書いていった。

2.3 研究方法

真鍋 (2009) は、実践を行う教師自身が研究を行うことに伴う理論と記述の限界について指摘しつつも、一人称アプローチについて可能性を見出している。市嶋 (2015) は、実践研究において、実践を担う教師自身をも実践に参加する者として、教師自身の発話や授業記録なども積極的に研究対象とし、当事者性を明確に浮かび上がらせることの重要性を論じている。佐藤 (2008) は、質的研究を行うものは、「現場の言葉」を「理論の言葉」へと移し替えていく通訳のような存在であると述べている。本研究では、これらの論を踏まえ、発表者＝支援者とし、発表者が行った実践に密着した事象を質的に分析したものをデータとして示す。具体的には、読書感想文を書く活動を子どもと保護者の許可を得て録画したものを、ことばだけでなく動作も含めて詳細に書き起こした文字化資料を分析データとする。それにより、活動を行った「現場の言葉」を綿密に分析し、「理論の言葉」として記述することをめざす。データの分析・考察は次の手順で行った。まず、分析データにある発表者と子どものやりとりをスキヤフオールディングが行われている場面ごとに区切った。そして、そこにコードを

割り当てていき、さらにカテゴリを作成した。

3. 分析と考察

3.1 発表者のスキヤフオールディング

分析の結果、発表者は子どもとのやりとりの中で、①子どもに質問をして書く内容を引き出す、②子どもがうまく言えないことを代わりにことばにして提示する、③子どもが次に書くべきことを示唆する、④書き間違いや正しい書き方を示唆する、というスキヤフオールディングを行っていることがわかった。このことから、発表者は、スキヤフオールディングを行い、次のように子どもの書く活動を促進していることがわかった。(1) 子どもの内言を外言化して書くことを引き出す。(2) 子どもが自分で次に書くべきことを考えたり間違いを見つけて正しく書いたりできるように導く。

3.2 発表者の教育観

考察の結果、書く活動の促進(1)、(2)では、発表者は子どもに書く内容や書き方を指示せず、やりとりの中で子どもがもっている力を引き出すことにより、子どもが読書感想文を書けるように導いている。このことから、発表者は、子どもが主体的に読書感想文を書く活動に取り組み、自分の力で書けるように支援しようと考えていることがうかがえた。その一方で、発表者が自覚していなかった教育観があぶり出された。(2)では、発表者は子どもが自分で間違いや正しい書き方に気づくように導いていながらも、導く先は発表者が設定している。このことから、発表者の中に子どもが書くべき読書感想文の枠組みがあり、その中に子どもを入れることで、その枠組みを再生産しようとしていることが明らかになった。

4. おわりに

本研究により、発表者の中にある相反する教育観が明るみに出た。本研究により可知的なものとなった二つの教育観のズレに、発表者が今後どのように向き合っていくのか。それが発表者のスキヤフオールディングにどのような影響を及ぼすのか。今後の課題としたい。

注)

1) 子どもが課題を達成したり新しいことを理解したりする時に教師が行う一時的で体系的な手助け (Hammond,2001)

【引用文献】

市嶋典子 (2015) 「第4章 実践者による「実践研究」に内在する当事者性の問題—「共在者」としての教師と学習者への注目—」 舘岡洋子編著『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版、pp.71-91

佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社

真鍋眞澄 (2009) 「第6章 フィールドでダブルロールを担うとき—ニューカマーの子どもの文化的アイデンティティ研究から」 箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際Ⅱ—分析・解釈編』ミネルヴァ書房、pp.91-109

Hammond, J. (2001) Scaffolding and language. In J. Hammond (Ed.). *Scaffolding: teaching and learning in language and literacy education*. Sydney: Primary English Teaching Association. pp.15-30.

Scrivener, J. (1994) *Learning teaching: a guidebook for English language teachers*. Oxford: Heinemann.